

序

社会学ゼミも6年を経過した。今年の新入生からは2名が来るにとどまり、若干寂しい結果となった。新カリになってから、社会学ゼミの不人気ぶりが目立っている。なんとかしたいところではある。

今年は、上記の2人の新加入の他、4年生4名、3年生と2年生が3名ずつ、計12名でのゼミ運営となった。4年生は、3名が無事卒論を書き上げ、卒業の運びである。

本年度も、例年と同様のパターンでのゼミ運営となった。前期は、『地域開発政策における公共事業の財政問題 土木・建設産業と地方財政制度を中心として』（小森治夫，2005，高菅出版）をテキストとして、主に公共事業について考えた。テキスト自体は、若干内容的に不満はあったものの、公共事業を概括的に理解するにはある程度効果があったように思う。また、前期の終わりには、施設見学として、日本製紙の附属施設である『リサイクルプラザ紙遊館』を訪れた。製紙工程に関する知識のみならず、紙のリサイクルに関する知識も知ることができ、有益であったように思う。

夏期休暇中には、8月24日から25日にかけて、恒例のゼミ旅行を行った。本年度は、深川・留萌を経由し、オロロンラインを北上して羽幌までの旅を楽しんだ。途中、神居古譚、苫前町のウィンドファーム、留萌の黄金岬、北竜町の道の駅周辺のひまわり畑などを散策した。これらが、今回のレポートのきっかけとなっている。また、個人的には、羽幌のホテルから見た夕陽の美しさが印象に残っている。

後期は、これまた恒例の、学生によるレポート作成である。従来、特定の自治体を対象にレポート作成を進めてきたが、今年度はさまざまな地域の、特色ある部分を垣間見ることができたので、個別テーマ（鯨漁・神居古譚・北竜のひまわり・北海道米・風車）を設定してのレポート作成となった。また、今年は新入生が2名であったため、3人の2年生にも昨年に引き続きレポートを作成してもらった。昨年同様、本年度も、後期に行事や私の出張が多く、あまりゼミを開けなかったが、今年は学生のためのゼミもしばしば行うようになり、それなりにゼミの自律的能力は高まりつつあるようにも思え、心強い。

また、福本君の卒論の調査として同伴した沼田町での聞き取りは、非常に興味深かった。広大な田地の広がっているであろう沼田の地で、吹雪に遭遇して、若干の緊張を覚えながらの道程も忘れられない記憶である。

早いもので、もう一年が終わろうとしている。個人的には、今年は多忙であったような印象がある。その分ゼミ運営に対する力の入れ方は必ずしも十分ではなかったようにも思う。しかしながら、学生たちは順調に成長を遂げているように思われる。「親はなくとも子は育つ」、ではないが、学生たちの能力をもっと信頼してもいいかなと思える一年であった。

皆さん来年もがんばってください。

角